



みなさんこんにちは。

ご紹介いただきました川内村の村長の遠藤と申します。

NASHIM の設立 30 周年、誠にありがとうございます。

このようなタイミングでこのような機会を与えていただきました関係者の皆様に感謝を申し上げたいと思います。また冒頭で、長崎の田上市長からエールを贈られました。本当にありがとうございます。

私の方からは、被災を受けた川内村の紹介と長崎大学の関わりについてお話しさせていただければという風に思います。



豊かな森に囲まれて四季の移り変わりを身近に感じながらどこか牧歌的な雰囲気のあるとても素敵な川内村です。震災前は約 3,000 人の村民が山間に生活をしておりました。

そういう小さな自生豊かな村に放射性物質が降り注いでしまいました。川内村は事故が発生した第一原子力発電所から 30 km 圏内にあります。東側の、村の約 1/3 が 20 km 圏内というところでございます。



地震による影響は、一部家屋が損壊したり、あるいは道路の裏面が崩壊したなどの影響はありましたけれども、地震で直接亡くなるという村民はいませんでした。

## 津波と東京電力福島第一原発事故



敷地に迫る津波、全電源喪失による原子炉のメルト・ダウンそして水素爆発



しかし、第一原子力発電所の事故によりまして、当初隣の富岡町の町民約 6,000~8,000 人が川内村に避難をし、村としても公共施設などをすべて開放して富岡町民の受け入れをしてきました。

## 富岡町民避難所の様子 (H23.3月12日~16日まで19施設)



マイカーで川内村へ避難 数珠つなぎ

富岡高校川内分校 体育館



川内村民体育センター

川内村中学校 体育館

その時の富岡町民の避難の様子です。川内村と富岡町は車で約 20 分程度の距離にありますけれども、当時は 6 時間から 8 時間かかりました。

川内村の公共施設、体育館などに避難をしてきている富岡町民の様子です。

## 郡山市ビッグパレットふくしま避難所の様子



福島県内最大の集団避難所 2,300人

支援物資の受け取りのため長い列



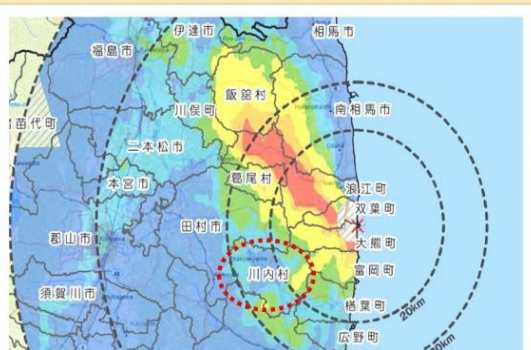
コンベンションホールでの避難の様子

食事の提供

その後プラントの状況が悪化して富岡町民と一緒に川内村民、すべての村民が福島県の中央部にある郡山市のビッグパレットに避難を余儀なくされました。

避難をするというようなことは初めての経験でありますし、村民にとっても急激な環境変化の中で戸惑いを感じておりました。

## 航空機サーベイによる空間線量率 (H23.4.29現在)



川内村のその当時の空間線量率です。20 kmから 30 kmの中に川内村がありますけれども、他の被災地から比べると比較的線量が低いということがお分かりになるかと思います。

比較的線量が低かったということと、それからプラントの水素爆発の可能性が少なくなったということで 2011 年の 9 月に 20 kmから外、20 km圏外が（避難指示区域）解除されました。

## 「帰村宣言」 2012年1月31日

「戻れる人から戻る  
心配な人はもう少し  
様子を見てから戻る」



- ・避難より帰還するオペレーションの方が難しい
- ・制約や制限するものではない
- ・行政機能を戻し最前線で帰還環境を整える。

7

それを受けまして2012年の1月に帰村宣言をしました。  
逃げろというオペレーションは簡単ですけども、戻ろうとい  
うオペレーションがどれだけ難しいかということはこの10年  
間感じてきました。

## 川内村内における土壌サンプリング



帰村宣言をする前に長崎大学の高村先生、そしてそのクルー  
に川内村の状況、環境、それから土壌や水などの検査をしてい  
ただきました。この写真がそのときの様子です

## 長崎大学との連携協定締結

- 1、土壌の放射性物質測定、除染効果の評価に関すること。
- 2、食品・飲料水等の放射性物質測定を通じた、住民の安全・安心の担保に関すること。
- 3、健康相談や講演活動、検診等を通じた住民の健康管理に関すること。
- 4、保健医療福祉活動等を通じた住民の健康増進に関すること。



その後2012年の5月から、長崎大学から折田保健技師が派  
遣をされまして、翌年には大学との連携協定を結ばせていた  
だきました。

当時の片峰学長が来られまして我々職員をはじめ、村民の皆  
さんに励ましていただいたのを記憶しております。

## 高村教授・林田教授 甲状腺検査と相談会



その協定に基づきまして、高村先生、林田先生には甲状腺の  
検査などをしていただいております。

この写真はそのときの、お母さん方への結果の報告、それか  
らリスクミなどを含めてお話をさせていただきました。

10

## 放射能リスクコミュニケーション

(保健技師の派遣)



11

さらには折田技師には、川内村に我々と一緒に生活しながらリスクミにあたっていただきました。

この写真は、高齢者の世帯を一人で廻ってですね、放射能の中で生活するための注意点などを話していただいているところでもあります。

## 健康講座の開設



12

高村先生には健康講座の開設もしていただきました。放射能とはどういうものなのか、人体への影響はどういう風に影響を及ぼすのか、何を注意すれば生活をしていけるのか、というようなことを直接村民の人たちに話をしていただきました。

## 人口の構成比率と避難状況

(令和4年2月1日現在)

区分	人口	年少人口		生産年齢人口		老年人口	
		0~14歳	構成比	15~64歳	構成比	65歳以上	構成比
2011. 3.11	3,028	265	8.8	1,732	57.2	1,031	34.0
2022. 2. 1	2,431	153	6.3	1,189	48.9	1,089	44.8

令和4年2月1日現在

帰還と避難状況

郡山市内	112人
いわき市内	116人
田村市内	70人
その他県内	52人
県外避難	72人
避難者計	422人

住基台帳の人口	2,431人
村内での生活者生活者の割合	82.6%

県外には、27都道府県で避難生活

村内と避難先で二重生活しているため住基人口数と避難者数は一致しない。

13

そしてその結果が現在 82.6%の帰還率です。

しかし一方でまだ 2 割の方々が避難をしているという状況です。その2割のうち6割は子どもたちや若い人たちの世帯であります。ですから高齢化率としてはきわめて 50%に近いというような状況であります。いまだに県外に避難をしているという人たちもおります。

しかしもう 10 年以上経ちますので、避難というよりも移住というようなところで新しいところできちんとした生活をされているという風に思います。

私自身もこれまでさまざまな不条理やジレンマ、軋轢と戦っ

てきました。いつもこう背中を押されているような緊張感に満ちた日々を送ってきました。しかし、それは僕にとって不幸な時間であったかという、そうではないという風に思っております。

目の前の課題を解決していく、そういう時間があるということは、僕にとってもポジティブな時間だったのであると思っております。

長崎大学の支援がなければ、今の川内村はないという風に思っております。改めて関係者の皆さん方にお礼を申し上げます、ひとつ私の話とさせていただきます。